

## 折折おりおりのうた

ホームの一室。声をおし殺して、娘がベッドに伏している母をなじっている。「あんな歌を作って、わたしに恥かかせて。あんただけではないんで。家には受験の子供もいるし忙しいんで……」。母は、「あんまりだれも来んものだから……」と、口ごもる。

ホームでは、月一回、お年寄りの折折のうたが廊下に張り出される。いま娘にしかられている母の句は、「百姓もしていないのに面会に来ん娘」。そのものずばり、身内を恋うる訴えである。その老いた母の心は、ついに娘には通じようもなかった。その句と並んで、他のお年寄りの、「とり入れも無事にすんだと面会の嫁のことばにひと息つきぬー山室スミエ」の歌もあつたのに。間もなく母は他界。その句が最後のものとなつた。

ホームはいま、ケシの花盛り。お年寄りひとりひとりの今年の記念撮影は、この花の中。九十五歳の羽田野モモエさんはすんでからも、まだ不満そう。「寮母さんが髪を直してくれたが、少し年寄りじみた顔になった。もう少し髪を前に出してくれれば

よかつたのに」と。こうした日日の毅然たる姿は、ホーム随一である。彼女の最近の歌―「もろともにもありがたく思うや日の本のここは楽土らくどの任運じんうん荘かな」

もちろん、私たちは、任運じんうん荘がこのまま楽土であるとは、思いもしない。しかし、私たちは知っている。ここを終つひの住すみ処かとするお年寄りの思いが切切とこめられてい  
ることを。彼岸にたどり着くまでの一時の安らぎを、ここ任運じんうん荘に求めやまないこと  
を。

たとえ、みすばらしい老人ホームのたたずまいであろうと、ここは、楽土とならな  
ければならない。

(一九八七年五月二十九日)